
すみっこのわたし

水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すみっこのわたし

【Nコード】

N1692Z

【作者名】

水月

【あらすじ】

身分差のある夫と私。政略結婚でも結ばれてうれしかったのに・・・。実際の結婚生活には、つらい現実が待っていた。私は今日もこのすみっこに生きている。

1 私のこと

美しい金髪の束ねた髪、そして青い瞳。どこから見ても、誰が見ても美しい夫。私は冴えない元成金・没落一族の女。なぜ、こんな人が私と一緒にいるのか？それは私と彼が政略結婚しているからだ。夫は結婚前から、こんな美しい容姿であるため様々な浮名を流していたようであった。加えて、頭脳明晰で家柄も代々学者や医師を輩出している優秀な一族である。これでは女がほっとくはずがない。当初は私も、その容姿端麗な外見、そしてその付随するもの、そしてなにより気品のある紳士的な態度にすっかりだまされてしまったものだ。

しかし、いったん結婚してしまうと彼の態度は豹変した。私はもともと冴えない上、容姿もいまいち、頭もそれほど・・・といった人間であった。いや、外見に関してはいまいちどころか、夫から言わせれば今まで知り合った女の中でも、下の中くらいだとのことだ。彼は、私をなじることが日常茶飯事となった。暴力まではないが、言動は冷ややかになっていった。また、浮気や女遊びも公然と行うようになり、パーティーなど夫婦同伴の集会には、愛人を伴っていることも多い。彼曰く、私を、人様に妻であると紹介するのは、恥ずかしくて出来ないのだという。私は「じゃあなぜ私を選んだの？」といったもの疑問を心の中でつぶやくのであった。しかし、答えはわかりきっている。没落した我が一族が彼の一族に身売りをし、取り入って私を好きなようにしてください、とさしだしたからだ。私の運命は決まっているも同然だった。

婚約したての頃は、そこまでわからなかった。ただ、彼の表面だけのものに振り回され、のぼせ上がっていたのだから・・・。

そう、これは政略結婚なんだから、あきらめるしかないのだ、と唇をかんで私はいつも我慢する。「お前みたいな女の出来損ないが、俺と結婚できたことだけでもありがたいがたすぎるくらいなんだ。」と彼

はよく私に言った。

・・・その通りだ。このままいけば売れ残りは必須だったはずなのだから。そして、生活も今のように夫に守られたものでなく、明日食べるものを確保するのも難しい状況になっていたに違いない。

しかし、私はお飾りの妻どころか、女中か下働きのようなものであった。炊事・洗濯など、彼は彼の実家のようにメイド・執事をおかず、すべて私にさせた。私を信用しないのか、家計管理は彼が行っていた。また彼は、絶対に私には触れようとはしなかった。結婚初夜、彼は私を、まるで汚らわしいものを見るように「あっちへいけ。お前の部屋は向こうだ。」と冷やかな視線と言葉をあびせ、私は彼の部屋から追い出されてしまった。私は呆然としてしまったが、すごすごと向かいの南角部屋に引っ込んだ。悲しくて、悔しくて、私はそのとき政略結婚をした彼の、本性を見たのだった。

2 夫のこと

私の夫はアルベール・クレイトンという。クレイトン家といえば、私たちの住むエダル地方では知らぬ人がいないほど名家である。多くの学者を生み、彼らは非常に優秀であった。私の義父である、クレイトン家の現当主も、王家から侯爵の地位をいただいており、彼自身は優秀な宫廷医師であった。また義母は、クレイトン家と並ぶ2大貴族・ゼフリール家の令嬢である。義父には3人の息子がおり、その次男にあたるのが、アルベールだ。

アルベールは、他2人の兄弟より優秀であり、次期当主と目されていた。しかし彼自身は面倒ごとを避けており、宫廷医師になつたにも関わらずその地位を辞してしまつた。しかし、能力の高い彼は王宮からその才能を惜しまれ、貴族・王族対象の選任教育者として、宫廷にひきとめられた。一方で彼は顔も広く社交的であつたため、趣味・道楽と称しその人脈を生かして貿易や経営なども行つていた。彼はそちらでも、才能を發揮していた。

見た目は義母一族譲りの美しい容姿を持ち、能力は優秀な義父の血を受け継いでいるアルベールである。幼い頃からそれなりに人にもてはやされ、彼自身も自分の立ち位置や魅力をわかつていたのだろう。彼は非常に冷静で、冷酷な部分があつたと思う。自分に益にならない人物は、それなりに排除してきていたし近づこうともしなかつた。また、女遊びも非常に激しかった。出入りしている宮廷・貴族・果ては王族まで、彼に熱を上げる女性は多くいた。後から知つた話だが、彼は王家の遠縁に当たる姫と婚約も勧められていたという。しかし、なぜか彼はそれを断り続けていたそう。そう、彼には想い人がいたのである。

この話は、あくまでも結婚前に流れていた噂にすぎないのだが、私はなぜかそれが本当のことであると確信していた。

噂の内容は、アルベールが学生時代、ある中流貴族の妻に熱を上

げていて、二人は想いを遂げてしまったこと、そして彼女が夫の知らぬ間にアルベールとの子供を身ごもってしまった上に、流産で亡くなってしまったこと、しかもいまだアルベール自身はその婦人を忘れられず、彼女の面影を色濃く残す娘に執着していること、であった。

もし私が彼と結婚せず、今のような状態にならなければ、この噂が根も葉もないものだと思っていたのだらうと思う。しかし、今のつらい現実を目の当たりにすると、その噂も本当のように思えてしまふのだ。だが、ある出来事でその話が事実であるということがわかってしまふ……。

3 夫婦の会話のこと

夫が夜分遅く帰宅した。私は自室のすみにあるソファで本を読んで、夫の帰宅を待っていた。いくら冷たい夫でも夫には変わりなく妻として迎えるのが私の習慣になっていたからだ。夫はいつものように玄関先に出てきた私を一瞥し、通りすぎようとした。が、今夜はめずらしいことに途中で立ち止まり、肩越しに私を見てこう告げた。

「おい、明後日宮廷で夜会が開かれる。お前も来るんだ。いいな。」
結婚してからはじめての夜会だ。でも、なぜ私を連れて行く気になったのだろうか？怪訝な表情をしていた私に彼は、「王と王妃が、お前を見たいそうだ。いいか、余計なことはするな。俺の面目はつぶしてくれるなよ。」と言って、今度こそ本当に自室へ入っていた。

夜会はほとんど出席したことはない。私は、成金で貴族世界に無理矢理入ったあるまじき下品な一族の人間として評されていた。もちろん両親でもある。伝統ある、保守的貴族社会には受け入れてもらえなかったのだ。だから、公の集会に招待もされなければ、されても一種の陰湿な娯楽の対象にすぎず、苦痛な時間だけが流れていた。また、父が事業に失敗してからは没落した貴族として蔑まれていたため、余計に華やかな世界とは縁がなくなった。家計は火の車で、成金上がりの両親は金の工面に必死であり、残った私も生計のたしにと、こっそり町へ働きにいたり、賃金が払えずメイドも執事も解雇していたため家事を切り盛りしたりしていた。

王家の人々が私を見たいのは、気まぐれと興味本位に過ぎず、友好的な感じは一切ないのだろうと思う。実は私とアルベールは結婚

しているが、結婚式は挙げていない。この国の法律で定められている、結婚証書を役所に提出し、その後王家の民事担当官に報告をする、という形式的な手続きしかしていないのだ。たぶん、普段から他人に妻である私のことを知られたくないアルベルは、王と王妃に直接それを報告したのだろう。彼は王や王妃に謁見できるほどの地位にあり、それだけ近いはずだから。まあ、彼は宮廷でも有名な人だし、それはなんら不思議はない。彼の報告で、王と王妃は彼の伴侶を知りたくなっただけであろう。

そこまで考えて、私ははっとした。夜会に着ていく服がないのだ。私の家のものは、ほとんどが競売にかけられ、売れるものはほとんどを売りにだしていた。ドレス類もその一つである。私は夫の元に嫁いでくるとき、普段着と外出するときの上質であるが、型が古く地味なドレスを数着しか持ってきていなかった（というか、もってこれなかったのだが）。王家の夜会にふさわしい、豪華なドレスなど一着もない。私は途方に暮れて思案した。夫にドレスを買ってくださいなどは、口が裂けても言えない。彼に言ったところで、渋い顔をして辛辣な事を言われて終わりであろう。彼は、私が話しかけようとすると不機嫌になるからだ。彼の機嫌を損ねるのは得策ではない。私は溜息をついた。仕方ない、外出用のドレスの中でも、なるべく新しそうなものを着ていくしかなさそうだった。

間幕 妻のこと

あの女は、いつも角部屋にいる。正確には俺があれを追いやった、というべきなのだろうが。

あれは結婚前から冴えない女だった。舞踏会でも、集会でも。壁の花どころか存在感さえ薄い。ついでに言うと、特徴はなく、とりたてて頭脳明晰でもなく、むしろ外見は平凡以下であると思う。それなのに政略結婚といえども、なぜ、よりによってあの女なのか。俺には王族ゆかりの姫から、貴族の令嬢などよりどりみどりだったのに。

「アル、もう。ぼんやりしてどうしたの？」

情事後、ベッドの上で煙草を吸いつつ、とりとめもなく考えごとをしていた。すると、情事の相手である女が、裸の胸を押し付けるようにすりよってきた。仕事先の仮面舞踏会に出席したときにたまたま一曲相手しただけだが、彼女から迫ってきて始まった関係。彼女はとある貴族の令嬢であった。俺はビジネスと体だけなら、と条件をつけて一夜を共にした。それからというものの、ほぼ毎週末、王宮の仕事を終えてから、彼女が馬車で迎えに来ることが多くなった。彼女をうまく利用し、多額の金を俺の会社に投資させている俺としては、いい金づるである。金儲けでき、彼女の豊満な肉体も楽しむことが出来る。彼女は令嬢らしくしとやかで、美しい肢体を持ち、さらに処女だった。俺がここまで教え込んだようなものだ。しかし、同時に彼女は世間知らずの娘でもあった。俺にのぼせ上がっているのだ。だから、うまいことをいえばすぐになびいてきた。

「なんでもない。」

俺は煙草を灰皿に押し付け、彼女をだしぬけにベッドへ組み敷いた。

「あつ・・・またなの？もう・・・。」

しかし、どんなに彼女や他の女を抱いていてもぬぐいきれない、あ

の光景。脳裏に浮かぶのは、埃っぽいあの角部屋の、セピア色の光景。そして――――。

俺はその不可解な気持ちを振り切るために、彼女を明け方まで何度も抱いた。

4 夜会前日のこと

夜会前日の午後、私は町へ買い物に出かけた。今日の夕食の材料を買おうといつもの食材店へよつた帰り道、私はふと立ち止まった。服飾店の窓越しに、レースの美しいドレスが飾つてある。女性なら一度は着てみたい、と思わせる上質な布地に、清楚なスタイルのドレスであった。

しばらくドレスに見入っていたが、ふとわれに返り、窓に映る自分の顔を見つめた。どこにでもある平凡な顔、ブラウンの瞳に髪、貧弱な身体。そして同時に夫の言葉も思い出す。

『女のできそこない』

夫が言いたいことはわかる。容姿だけでなく、とくに雰囲気、内面的なものも揶揄しているのである。私は人見知りで、辛気臭いと男性から言われることも多くあった。だから、なるべく社交的でいようと、明るくなるうと努力した。しかし、かえってその反動で周りを気にするあまり、臆病さに拍車がかかったのも事実である。

私は溜息をついた。だめだ、どちらにしろ私には似合わない。それから金銭的にも余裕はない。そのドレスをはじめ、ショーウィンドーの商品はみな素敵だったが、自分の懐でまかなえる金額ではなかった。名残惜しかったが、しかたなくその場を離れ家路へと急いだ。

家につくと、食材入りのバスケットをテーブルにおいた。外は乾燥していたため、喉がかわいたので、茶の準備をする。湯を沸かす間、しばらく戸棚の整理をしていると、玄関のベルが鳴った。誰だろうと、ドアをあけると、配達員が大きめの箱を抱えて立っている。

「おとどけものです。サインを。」

伝票にサインすると、私は箱を受け取った。表面の送り主をみると、私の実家からだ。箱をあけると、薄いブルーのイブニングドレスがはいっているではないか……。添えられた手紙をよむと、母の字でこう書かれていた。

『愛する娘へ

元気でやっていますか？あなたがそちらへいつてから、もう何年もたったような気がして寂しく思います。体には気をつけるのよ。それから、今度王宮夜会があると思いますが、私たちにも招待状が届きました。もちろん、あなたとアルベル殿も招待されていると思います。出席するのでしょうか？でも、着ていくドレスがないだろうと思って、これを贈ります。私たちはいつでも、あなたのことをおもっていますよ。』

わたしはその手紙を読んで、ちよつと涙ぐんだ。今回父母は不参加だとも書かれていたが、どうやら両親のところへも、王族から夜会への招待状が届いたらしい。多分、興味対象の一族の顔もみたいと思ったからだろう。父母は、夫が王宮で仕事をしているのを知っている為、当然、妻の私も夜会に招待され、出席するだろうと考えたようだ。そして、着ていくドレスに困っているのにも思い至ったらしい。私があまりドレスを多くは持参していないことや、夫との仲をうすうすは知っているのもあつて贈ってくれたに違いない。私は両親に心配をかけたくないため、何も言わないようにしているのだが……。

父母の好意をありがたく思いつつ、ドレスを広げた。薄いブルーの、派手さはないが品のいい型でドレープがさらさらと波打っており、夜会にも着ていけそうなドレスだった。着てみると、サイズもぴったり合っている。しばらく姿見をみつめていたが、私はふと心配になった。このドレス、かなりいい値段なのは……両親もお

金がないのを知っているのに、家のことが心配になる。そして、その夜すぐ両親へのお礼と、近況報告の手紙をしたためたのだった。

5 夜会に行く準備と片道でのこと

夜会当日になった。私は朝早起きして、家事を済ませ、買い物を終えて家路についた。すでに午後3時を回っている。午後6時には夫が馬車を手配しているの、それまでに準備をしておかなくてはならない。だんだん気が重くなってきた。私はもともと人ごみは苦手だし、過去の嫌な出来事や人の好意的でない視線を思い出すと萎縮してしまいがちである。しかし今はもうアルベールの妻であり、クレイトン家に嫁いだ身。妻としての勤めをはたさなくてはいけないのだ。溜息をついて、ドレスに着替え化粧を始めた。他の女性なら、髪結いや化粧をする専属メイドがいるのだが私にはいないため、それなりに見られるように化粧をした。薄くおしろいを塗り、頬紅を薄くつける。薄い色の紅を唇にさし、柑橘系の香りがする香水を首筋に少量つけた。髪は結い上げ方が難しい、流行の髪型はもちろん私の技術では不可能なため、一つにまとめた髪を、青い小さいコサージュと真珠つきの髪留めで留めた。

この髪留めは、結婚前まだアルベールとであつたばかりの頃に、彼から旅行の土産と称してもらったものだ。私はうれしくて、こわれてしまつたりしないように、彼と会うとき以外は大切に宝石箱に入れて保管していた。土産物でも、愛する彼からの初めての贈り物である。どんなものでも私にとっては大切だ。しかし彼は結婚後まもなく、私がかれをつけているのを見ると怪訝な顔をして「なんだ、それは？道化かなにかになつたつもりか？」と言い放った。私が「あなたからもらったのですが……。」という、彼は顔をしかめて「ああ、あの安物か……。忘れていたがな……。それはもう付けるな。似合わない。」と鼻を鳴らして部屋を出て行ったのだ。私はショックで自分の角部屋に閉じ籠り、泣いた。捨ててしまえばいいのに、私も未練がましく今の今まで捨てられずにきているのだ。

似合わないのはわかっている。分不相応とも言いたいのだろうが、どうしても私は彼とのつながりを自分から断つようなことはできなかった。

だが今回は、それとは別に見栄えのするアクセサリー類を私が持つていず、それだけが唯一もっている髪留めだったから付けたにすぎなかった。いつもは黒いゴムでたばねるか、そのままストレートにしておくかであったから。深い意味はないと思う。だが・・・もしかししたら結婚後初めて一緒に出かけるから、思い出の品をつけていきたいという感傷もあつたかもしれない。

なんとか準備を終えて靴をはくと、角部屋の扉をノックする音が聞こえた。私はあわてて扉を開けるとアルベルが無表情で立っていた。彼は一度宮廷からもどつてきており、彼も着替えていた。タキシードを着こなし、金髪はゆるく黒いリボンで束ねている。美しい彼のタキシード姿はとても様になっており、女性の目をひきつけてやまないであろう。

「すみません。お待たせして。」

「・・・行くぞ。」

彼は私の姿を一瞥しただけで、なにも言わなかった。彼にしてはめずらしい。いつもは嫌味の一つも言われると思つたのだが・・・。屋敷の外にでると、馬車が迎えにきていた。彼はさっさと馬車に乗り込んでしまう。私は普段着慣れないドレスのため、馬車の高い階段を登るのに時間がかかってしまった。その時、強い力で体を引っ張られる。アルベルが業を煮やして私を引っ張りあげたのだ。私はちよつと意外だった。彼は私に関しては、冷たい言動が多い。普段は今のようないふことがあつても、不機嫌な顔をし嫌味を言うか、舌打ちするかあまり私には触れないからである。今日はどうしたのだろうか？彼らしくない。

「ありがとうございます。」

と私がいつて彼の向かいに座ると、馬車が動きだした。彼は黙つた

ままだった。

馬車の景色は窓越しに次々と流れていく。夫は馬車に乗っている間中、窓に目を向けていた。一言も発しない。私も窓の外に目をやった。馬車の動く音が聞こえるだけで、馬車のなかには城につくまですっと静かなものであった。やがて森を抜け、街道を通り過ぎ城門が見えてきた。

馬車が城門内に入り城内への入り口につくと、彼は一人でまたさつさと下車してしまった。私は彼の性格をわかっていたので、転ばないようゆっくり降りようとした。そのとき、腰を抱かれ気がついたときには地に足がついていた。私は目を丸くして夫を見た。彼は無表情で私を馬車からおろすと、私を待つことなく、城内へと足を向けた。

6 王の間でのこと

王宮はかぐわしい色とりどりの花に囲まれた、それは美しい城であった。外壁は白く、壮麗である。また、吹き抜けの回廊を抜けるドーム型の広いホールへつくののだが、その天井には高名な画家により、美しい天使や神の壁画が描かれていた。その奥、さらに回廊を進むと王の間がありそこにはクリスタル製の彫刻が置かれ、金銀宝石で彩られた玉座があった。私は王宮に入るのは初めてだったので、全てがもの珍しく、目を奪われていた。田舎者のようにきよろきよろしてしまい、夫にはにらまれていたが。でも、私は今だけは彼の視線を無視した。今度は来られるかどうかすらわからない。だからこの素晴らしい城をよく見ておきたかったのだ。ホールを抜け、回廊を歩く。しかし、周りに人はまばらであった。そういえば、城門を抜けても人があまりいなかった。そう、彼は夜会開始より遙かに前にここへ着くようにしていたのだ。私ははじめ、彼の意図がわからなかった。しかしついた王の間で、王と王妃がいるのを見て納得した。彼は夜会で人目につく前に、王と王妃に私を会わせたかったのである。私は夫に連れられ、二人の前に立った。

「お初にお目にかかります。本日は、お招きいただきありがとうございます。ございました。私はアルベールの妻のオリエ・クレイトンと申します。」

と丁寧な膝を折り、お辞儀をした。すると王は、顔を上げよ、と命じた。王は銀髪に、しわのきざまれたいかめしい顔つきで私を見ていた。脇で王妃も笑顔で私を見つめている。王妃も銀髪であったが、顔はまだ若々しく、はつらつとしていた。王妃が夫をみて言った。

「アルベールほどの人が、どんな美女と結婚したのかしら？と思っていたけど・・・ちよつと意外だでしたわね。」

王は黙つたまま、私を値踏みするように見ていた。そして夫に言った。

「お前ほどの男なら、もっと良い女もいただろうに。だから言ったではないか。分家のマルグレット姫との婚姻を進めよとな。」

夫は黙つて聞いていたが、やがて口を開いた。

「あの縁談は、私にはすぎたお話です。姫につりあいません、私では。」

すると、王妃はくすつと笑つて、夫に言った。

「あれが忘れられない？・・・そうね、あなたも年をとつたということかしら。たしかあそこは今年・・・」

私は目の前の会話から突然締め出され、彼らがなにを言っているか理解できずにいた。夫はわかるらしく、無表情できいている。王も静かに王妃の話を聴いていたが、王妃が言葉を切つたところで夫は「そうですね。私もそれなりに大人になつたんでしょう。では、私達はそろそろ・・・」

とさりげなく話を切つてしまった。そのときちょうど宰相が、彼ら自身の夜会の準備のため、王と王妃に退室をうながしに来た。その為、二人との謁見はこれで終了したのだった。王妃は去り際私に「アルベールは才能のある人間よ。妻として足を引っ張らないようにね。」と言い残し、王と共に去つていった。私はうなだれた。アルベールの縁談話は噂で知つてはいたが、いざ自分の耳で事実を聞くところにも苦しいもののかとつらくなる。しかも、私は彼にとつてのお荷物的存在でしかないとみなされるのはわかつていながら

も、いざその言葉を實際聞くとやはり傷つくものだ。そして、最後の会話・・・妻の私が知らない何かを、他人は知っている。妻扱いされていないからそれも仕方ないのだろうが・・・

私は二人が見えなくなるまで膝を折り、頭を垂れていた。しばらくすると夫から「行くぞ。」と声をかけられ、私は我に返って夫の後を追ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1692z/>

すみっこのわたし

2011年12月14日22時26分発行